

倉敷市楯築弥生墳丘墓
第Ⅴ次(昭和60年度)・第Ⅵ次(昭和61年度)
発掘調査概要報告

1987年

楯築弥生墳丘墓発掘調査団

倉敷市楯築弥生墳丘墓 第V次(昭和60年度)・第VI次(昭和61年度) 発掘調査概要報告

執筆 大橋雅也
　　絹川一徳
　　近藤義郎
　　新納泉
　　古市秀治
　　北條芳隆
　　若林卓

編集 近藤義郎

1987年

楯築弥生墳丘墓発掘調査団



橋塚弥生墳丘墓遠景（西から）

序

倉敷市庄地区は、吉備の中核として古くからすぐれた文化をもって栄えてきた地であり、豊かで美しい自然とともに数多くの貴重な遺跡が残されています。

なかでも弥生時代後期の墳丘墓である楯築遺跡は、前方後円墳の成立を考える上で欠くことのできない重要な遺跡として、1981年に円丘部の一部が国の史跡に指定されています。

このたび楯築遺跡の全面的な保存・整備を図るため、岡山大学文学部考古学研究室の協力を得て、遺跡の範囲確認調査を実施いたしました。この結果、南西突出部先端の特異な形状が明らかとなるなど多大な成果を得ることができ、無事に所期の目的を遂行することができました。

本書はこうした調査の成果をまとめたものであり、学術資料として広く活用されることを期待いたしますとともに、あわせて今後の遺跡の保護・保存のための資料として役立てば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで御尽力を賜った近藤義郎教授はじめとする岡山大学文学部考古学研究室関係の方々、並びに文化庁・岡山県教育委員会・倉敷市水道局・地元関係各位の温かい御指導と御支援に対しまして衷心より厚く御礼申し上げる次第です。

1987年3月

倉敷市教育委員会

教育長 今 田 昌 男

謝　　辞

1985年秋、1986年秋と2回にわたって行なわれた今回の発掘において、多くの人達の協力と援助を得た。

まず、地元の日畠西山および矢部の皆さん、ことに楠強氏をはじめとする西山の方々は、下草刈りから清掃に至る縁の下の力持ち的援助を下された。また、矢部の方々も時に来訪され、私達を激励された。

ついで今回の発掘において、岡山県古代吉備文化財センターの皆さん、岡山市教育委員会文化財係の皆さん、総社市教育委員会社会教育課文化財係の皆さんは、物心両面で私どもを援助され、調査の円滑な遂行に寄与された。また中田豊氏、山口松太・晋子夫妻は、とくに多大な励しを私達に与えられた。

最後に、2回の発掘を通して参加した13の大学、北から山形、筑波、早稲田、東京、法政、明治、国学院、専修、京都、大阪、鳥取、岡山、広島の諸大学の院生、学生がある。宿舎も食事も相当に「劣悪」の中を発掘に励み、討論に参加し、本報告書の基礎を築いた。

以上記して心からの謝意を表明する。

1987年3月18日

橋築弥生墳丘墓発掘調査団

団長近藤義郎

例　　言

1. 本書は、墳丘の規模等を確認し、その性格を明らかにするとともに、保存のための基礎資料とする目的で、「橋築遺跡確認調査事業」として昭和60年度および61年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（文化庁）の交付を受けて実施した発掘調査の報告書である。
2. 遺跡の実測、出土遺物の水洗、接合、実測、トレースなどは、発掘参加者、中でも岡山大学院生・学生を中心に行なわれた。但しトレースの一部は平井典子氏をわずらわした。また遺跡・遺構の写真撮影は新納泉が行なった。
3. 執筆者の項目分担は目次に示したが、いずれも調査団の連日の討議をふまえたものである。なお、表現、用語などについては、できるだけ統一がはかられた。

倉敷市櫛築弥生墳丘墓第V次(昭和60年度)・第VI次(昭和61年度)発掘調査概要報告

目 次

序	倉敷市教育委員会教育長	今田 昌男	1
謝辞・例言	櫛築弥生墳丘発掘調査団長	近藤 義郎	■
I 調査の方法と経過		新納 泉	1
II 発掘成果			
1 突出部			
a 溝	若林 卓	6	
b 列石	大橋 雅也	7	
c 溝の堆積状況	北條 芳隆	9	
d 側面	絹川 一徳	12	
e 土器	古市 秀治	13	
2 円丘部			
a A・B トレンチ	大橋 雅也	16	
b C トレンチ	古市 秀治	18	
c D トレンチ	古市 秀治	19	
III むすび——櫛築弥生墳丘墓の規模と範囲——	近藤 義郎	21	

挿図目次

第1図 調査地位置図	1
第2図 植築弥生墳丘墓発掘区配置図	3
第3図 突出部前面発掘区配置図	6
第4図 突出部列石平面図・立面図	8
第5図 列石部分断面図	9
第6図 突出部溝断面図	10
第7図 突出部側面北壁断面図	12
第8図 出土土器	14
第9図 A・Bトレンチ上部石列 平面図・立面図	16
第10図 円丘部斜面トレンチ断面図	17
第11図 Dトレンチ第1石列跡平面図・立面図	18
第12図 植築弥生墳丘墓の史跡指定範囲	22

図版目次

卷頭図版	植築弥生墳丘墓遠景（西から）
図版1	上 南西突出部前面の溝（給水塔建設前の地表） 下 南西突出部溝と列石
図版2	上 南西突出部溝と列石（南上方から） 下 同 上 （北上方から）
図版3	上 第V次調査1区の状況 下 同区北拡張部の状況
図版4	上 第V次調査2区円礫・土器出土の状況 下 同区の列石 完掘状況
図版5	上 第V次調査2区の列石 下 第V次調査3区の状況
図版6	上 植築弥生墳丘墓全景（気球写真） 下 南西突出部前面全景（気球写真）
図版7	上 第VI次調査1区の位置（南から） 下 同区の列石（南西突出部東隅）

- 図版8 上 南西突出部列石東端の状況（南上方から）
下 同 上 （南東から）
- 図版9 上 南西突出部列石東端の状況（東上方から）
下 同 上 （上から）
- 図版10 上 第VII次調査2区の全景（南から）
下 第VII次調査2区東側の溝と列石（西から）
- 図版11 上・下 第VII次調査2区東側の円礫・土器出土状況
- 図版12 上・下 第VII次調査2区東側の列石
- 図版13 上 第VII次調査2区東側の列石（西から）
下 同 上 （上方から）
- 図版14 上・下 第VII次調査2区西側の状況
- 図版15 上 南西突出部側面（西から）
下 同 上 北壁
- 図版16 上 A・Bトレンチ全景（北から）
下 Aトレンチ下端の状況
- 図版17 上・左 Bトレンチ石列（北から） 上・右 同左（上方から）
下 Aトレンチ石列と盛土の状況
- 図版18 上 Aトレンチ石列（北から）
下 Bトレンチ円礫の出土状況
- 図版19 上 Cトレンチ全景（東から）
下 Cトレンチ南壁
- 図版20 上 Dトレンチ円礫の出土状況
下 Dトレンチ北壁
- 図版21 上 Dトレンチ第1石列跡
下 同 上 第2石列跡

I 調査の方法と経過

調査地の位置

楯築弥生墳丘墓は、倉敷市矢部および日畠西山にまたがって所在する（第1図）。足守川の流域を見おろす標高45m余りの丘陵の頂部に位置し、周辺の平地には足守加茂遺跡・矢部南向遺跡・上東遺跡をはじめとする弥生時代の集落遺跡が点在し、丘陵部には雲山鳥打遺跡や、鯉喰神社・女男岩といった弥生墳丘墓が築かれている。楯築弥生墳丘墓は、円丘部の一部が国指定史跡となっているが、南西突出部にはそのほとんどを破壊して給水塔が建てられており、不幸にもこれが遺跡の目印とされている。



第1図 調査地位置図 (岡土地理院 1:50,000地形図による)

調査の体制

倉敷市教育委員会の委嘱により、岡山大学文学部考古学研究室が中心となって楯築弥生墳丘墓

発掘調査団を結成し、発掘調査を実施した。第V次・第VI次調査には、全国各大学から大学院生・学生が参加した。参加した院生・学生は、13大学、27名にのぼる。調査団の構成は以下のとおりである（但し、数日間程度の参加者は除く）。

〔団長〕 近藤義郎（岡山大学教授）

〔調査員〕 新納 泉（岡山大学助手）、福本 明・鍵谷守秀（倉敷市教育委員会）、小野雅明（同・第VI次のみ）

〔第V次調査参加者〕 宇垣匡雅（岡山県古代吉備文化財センター）、家田淳一・松井潔・亀山行雄（岡山大学大学院）、北條芳隆・肩崎 由・大橋雅也・大西寿男・古市秀治・若林 卓（岡山大学）、石坂俊郎（早稲田大学大学院）、倉林真砂斗（東京大学大学院）、黒沢 浩（明治大学大学院）、滝沢 誠（筑波大学大学院）、本間元樹（広島大学大学院）、松木武彦（大阪大学大学院）、岩見和泰（山形大学）、大谷晃二（鳥根大学）、岸本直文（京都大学）、沢田秀美（法政大学）、茂木克美（専修大学）

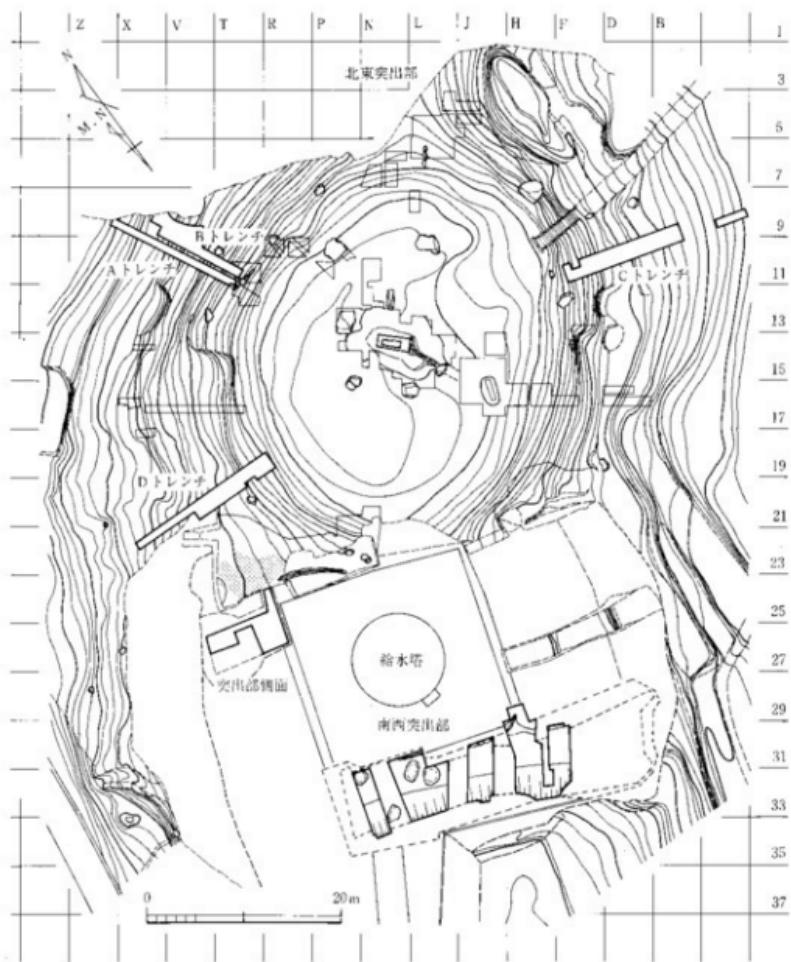
〔第VI次調査参加者〕 宇垣匡雅（岡山県古代吉備文化財センター）、石坂俊郎（岡山大学埋蔵文化財調査室）、大橋雅也・絹川一徳（岡山大学大学院）、古市秀治・若林卓・大谷輝彦・伊藤聖浩・柴田英樹（岡山大学）、黒沢 浩（明治大学大学院）、北條芳隆（広島大学大学院）、沢田秀実（法政大学）、大谷晃二（鳥根大学）、斎田克史（国学院大学）、滝沢 誠（筑波大学大学院）、岩見和泰（山形大学）、野島 永（広島大学）、武藏美和（筑波大学）、藤井美保（早稲田大学）

第V次調査

調査の目的 現在の国指定史跡の範囲は円丘部の墳頂周辺のみに限られているが、これは、旧楯築神社境内、現鯉喰神社社地となっている土地で、国指定の当時は、それ以外の土地は私有地であったため史跡地から除外された。しかるに1982年倉敷市有地となつたため、すでに明らかになつてゐる本墳丘墓の範囲をあらためて確認し、とくに南西突出部の構造をつきとめるという目的で発掘を実施した。

円丘部は墳頂に平坦面があり、そのまわりの斜面に第1および第2の石列がめぐる。墳端は、地山削り出しの斜面の傾斜変換点などからいくつかの候補があげられていたが、明瞭な墳端を画する施設は検出されていなかった。そこで、円丘部においては、石列の構造と墳端を確認するために、A・BトレンチおよびCトレンチを設けた。

調査の方法 突出部先端を画する溝の外側の範囲を明らかにするために、7個所に小規模なトレンチを設けて溝の概形を確認したあと、それにもとづいて重機で給水塔建設時の造成土を取り除き、造成前の地形を測量した。続いて西から1区～4区の4個所に発掘区を設け、ベルトコン



第2図 桜井弥生墳丘墓発掘区配置図 (縮尺 1/600)

ペアーを用いて掘り下げをおこなった。なお、給水塔の敷地を画するフェンスの直下付近に突出部の先端がくると予想されたため、調査に先立って地下約3mまで樹脂（岩水開発株式会社・岩水3号及びミクロメント）を含浸させ、フェンス直下まで掘り下げることにした。各地区とも、溝には、角礫・円礫と、小形特殊器台や特殊壺などの土器片が多量に流れ込んでいた。流入土を

除去したあと、発掘区を突出部側に一部拡張して突出部の先端に貼られた列石を確認した。円丘部は、史跡境界線から下方に細長い発掘区を設定し、調査をおこなった。

調査の経過 1985年9月30日に機材を搬入、10月1日から本格的な調査を開始し、10月25日に作業を終え、26日に撤収した。10月13日は調査を休止した。

突出部は、10月1日から3日にかけて、第IV次調査の発掘区を確認して埋土の一部を取り除くとともに、溝の外側の平面形を明らかにするために7箇所に小規模な発掘区を設け、溝の範囲を確認し、その結果にもとづいて、10月4日から重機によって造成土を除去した。9日に造成土を取り除く作業が終了し、翌日造成前の地形の測量をおこなったあと、11日に1区から3区までの発掘区を設定し、掘り下げを開始した。また、15日に3区の東側に新たに4区を設定し、掘り下げをはじめた。各発掘区から、角礫・円礫と土器が多く出土した。ほぼ溝内の掘り下げが終了した10月22日に、2区を突出部側に一部拡張して大きめの石が2個並んでいるのを確認し、突出部の先端に列石が立て並べられていることがわかった。それ以後25日まで1区・2区・3区の拡張を継続し、1区でも列石の一部を確認、2区では4個の列石のほぼ全体と裏込めの状況を明らかにし、3区では突出部の東隅にあたると思われる部分の列石を2個確認して終了した。

円丘部は、10月1日から伐採と発掘区の設定をおこない、A・Bトレンチは10月22日に調査を終了して埋めもどしにかかり、Cトレンチは10月23日に埋めもどしを終了した。

すべての調査が終了した後、10月30日に文化庁黒崎直調査官が視察し、31日から突出部の埋めもどしを開始した。

第VI次調査

調査の目的 主として次の3点を明らかにするために調査を実施した。第1は、第V次調査で明らかにされた南西突出部先端の列石が両端でいかなる形状を呈するのかという問題である。列石が角をなして突出部の側面に続く場合と、突出部の先端のみに列石が用いられている場合が予想されていた。第2は、第IV次調査で確認された、突出部の主体から延びると推定される排水溝の下方に見られた角礫群の広がりと性格を追求することである。第3は、円丘部斜面の構造ならびに墳端の確認である。これまでの調査で円丘部の斜面には第1石列と第2石列がめぐらされていることがわかっていたが、この構造は必ずしも明確ではなく、また、明瞭な墳端を画する施設も検出されていなかった。

調査の方法 以上の点を明らかにするために、4箇所に発掘区を設定した。南西突出部東隅にあたる地点を1区と呼ぶ。これは第V次調査の3区の北半をやや軸をずらして北および西に拡張したものである。また、南西突出部西隅と推定される地点に2区を設定した。この調査区は東端が第V次調査の1区と一部重複している。中央にベルトを残し、東側と西側に発掘区を設けた。

1区と2区は、給水塔を囲むフェンスの直下付近に列石が来る予想されたため、フェンスを移

動し、給水塔区画内1mまでを調査範囲として、あらかじめ土中に樹脂を含浸させ、土砂の崩落を防止したうえで発掘をおこなった。3区は、南西突出部のくびれ部の西側にあたり、第Ⅳ次調査の発掘区の南に接している。以上の1区から3区までは、給水塔建設時の造成土が約2mの厚さで盛られているため、重機によって造成土を除去したあと、造成前の地表面の測量をおこない、それ以下を人力で掘り下げた。円丘部の発掘区は、墳丘の西側の、比較的くびれ部に近い地点に設定した。第V次調査で円丘部にはA・B・Cの各トレンチが設けられているので、それに続けてDトレンチと呼ぶことにした。

調査の経過 1986年9月30日に機材を搬入して調査を開始し、10月31日に重機による埋めもどしを残して撤収した。10月12日は全面的に調査を休み、10月21日は重機による造成土除去作業のみをおこなった。晴天に恵まれ、雨による作業の中止が少なく、予定通りの期間で調査を終了した。調査日数は30日である。

1区は、10月1日に発掘区を設定し、造成土の除去に着手、10月3日に旧地表面の測量を終えて、掘り下げにかかった。10月10日には列石の東端を確認し、その後、列石の据え方等の細部の調査をおこなって10月23日に作業を終了した。2区は、10月3日に発掘区を設定し、造成土の除去を始め、10月6日に旧地表面の測量をおこなったあと、東側の発掘区の調査を開始した。西側の発掘区は10月10日に調査を始め、10月20日に埋めもどしをおこなった。2区の東側の発掘区では、列石がやや屈曲し、西の端に近いと推定されたが、なお西に続き、予定区域外に延びていることを確認し、それ以上は調査不能と判断して10月30日に埋めもどしを開始した。3区は10月20日に発掘区を設定し、造成土の除去に着手、10月24日に旧地表面の測量をおこなったあと、掘り下げを開始したが、第Ⅳ次調査の発掘区いっぱいに広がっていた角礫群の統一是認められず、斜面に墳丘築成時の地表面と当時の造成土を確認し、10月30日に作業を終了した。Dトレンチは、10月3日に発掘区を設定し、石列に対応するかと思われる施設を2段にわたって確認し、10月30日に調査を終了、埋めもどしをおこなった。

なお、10月22日には文化庁河原純之主任調査官が視察し、また、10月28日には気球を用いて墳丘の写真撮影をおこなった。

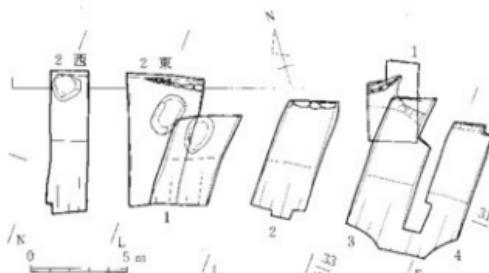
II 発掘成果

1. 突出部

a. 溝

第IV次調査において、南西突出部前面には大規模な溝が掘り削られていることが確認された。これを受け、第V次・第VI次調査では、この溝および突出部の構造を把握するために、あわせて6つの発掘区を設定して調査を進めた(第3図)。その結果、溝の形状・規模と突出部先端の構造が明らかになった。

この溝は、南北に伸びる丘陵の尾根を東西方向に切り通し状に切断しており、これによって、墳丘の南端を画している。溝の断面形は逆台形を呈し、幅広く平坦な底面からするどく屈折して法面が立ち上がる。底面の平面形は中ほどでわずかに屈曲して両端に向かってやや広くなる。墳丘



第3図 突出部前面発掘区配置図 ($S=1/300$)

(下の1~4は第V次発掘区、上の1~2は第VI次発掘区)

側の法面下部はさらに削り出されて列石が立て並べられており、この部分は突出部先端を形成している。

給水塔造成によって溝上半が削平されてしまったため、溝の深さおよび上端幅がわからなくなっているが、上端幅は6m以上あったことは確実である。中央部における溝底幅は、約3.2mであるが、列石はゆるやかな弧状を呈しているため、列石両端付近ではやや広くなる。溝の東側の列石構築に伴う削り出しが及んでいない部分では溝底幅は約3.8mを測る。西側での溝底幅は明らかにし得なかったが、3.7m以上になることは確かであろう。中央部での溝底の標高は約41.4mあり、溝南方の残丘頂からの比高約5.0m、円丘部墳頂半坦面からの比高約5.3mを測る。

溝外側の法面は、平坦な底面から約62度の角度をもって立ち上がる。墳丘側ではかならずしも明確でない。外側では傾斜が途中で変化して約40度となる。変換点の溝底からの高さは、一定していないが、中央部では約70cmである。また明瞭な肩は検出されなかった。

溝底面は、南北方向ではほぼ水平を保っているが、東西方向では中央付近が高くなっている。両端に向かってゆるやかに傾斜している。確認した限りでは、東側で約50cm、西側で約30cmほど中央より低くなっている。なお、溝底には、掘削時の凸凹をならし平坦にするために、数cmから20cmの厚さで整地土が敷かれている。

第V次調査1区および第VI次調査2区で、溝底付近から花崗岩の巨石3石が検出された。東側の1石は確実に基盤層中に含まれ、溝掘削に際して動かすことができず、そのまま放置したものではないかと推定される。他の2石は整地土上面より上位にあり、溝構築後に南側斜面から転落してきたものと思われる。第VI次調査2区の溝法面に残されている同大の巨石は、この想定を裏づける。

b. 列 石

第V次調査では、突出部先端を画す列石の存在をつきとめ、この列石が直線状に並ばず、やや弧を描くことを予想した。それに基づいて、第VI次調査では列石に直交させるように発掘区をグリッド軸から20度逆時計方向にずらして3個所設定し、列石の両端の様子を明らかにした。

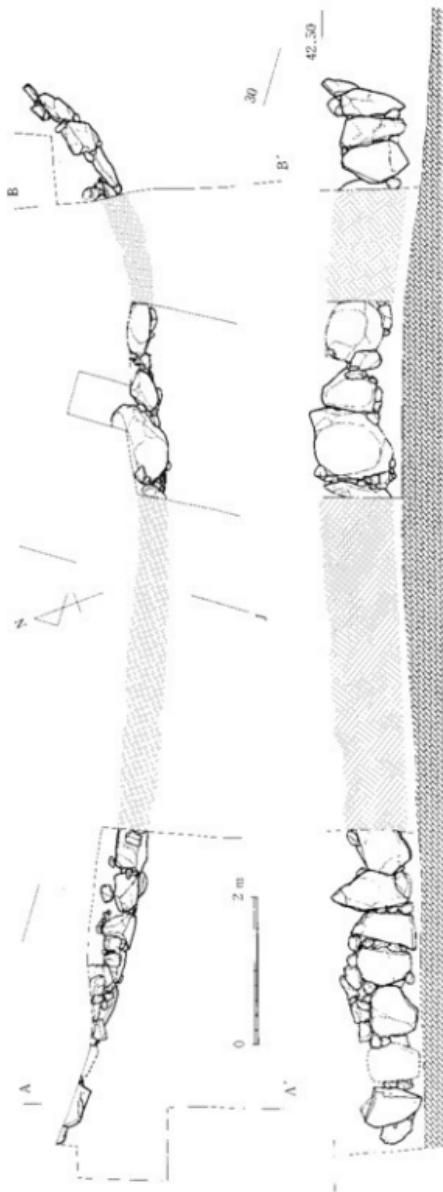
列石は、高さ0.6~1.0、幅0.6~0.7、厚さ0.3m程度の石を密接させて構築されている。また石のほぼ平らな面を外側に向けて揃え、平面において全体的に緩やかな弧を描くように並べられている（第4図）。

列石東端の形状は次第に弧がきつくなるとともに途切れ、突出部側面に続く状況は認められない。突出部側面を区画する施設・構造物は、第VI次調査を含め現在までの調査では検出されていない。最東端の石は他のものに比べて著しく小形になり、また石の上端の高さが高くなるなど、明らかに端を意識しているようである。西端は発掘区域外にのびるが、給水塔築造の際、破壊されたと思われる。現存する列石の全長は約15mを測り、その長さは突出部前端の幅を反映していると考えられる。

列石の石は1つずつ握り方を持ち、突出部前端側に約5~10度の傾きをもって立て据えられている。やや小さな石には下に置き土を施すなど、石の上端の高さをほぼ揃えようとする意図がみられる。石と石の隙間に20~30cm程度の大きさの角礫を詰め石として用い、安定を図っている。両端付近の石は、平坦な面を持つ板状の石材であるのに対し、中央付近のものは大きめで丸みを持つ。石材は、ほとんどが花崗岩である。

列石上部には詰め石と同様の角礫が一部残存しているが、給水塔築造時の破壊、およびそれ以前の流失が著しい。しかし突出部前面の溝の埋土中に多量の角礫・円礫が混入していることから、これらが何らかの形で列石の上方に配されていたことは確実である。特に角礫は一部の残存状態から、列石の上に数段積み上げられていたものと思われる。

第VI次調査1区では、突出部前面の削り出しが確認された（第5図）。これは、列石の石を並



第4圖 穿出部列石平面圖・立直圖 (S = 1/80)

べる範囲、つまり突出部前端の幅を規定するように、溝の突出部側の法面を削り出したものであると判断した。列石を据えるための掘り方は、列石から約20cm裏側で垂直方向に掘り込まれていることが判明した。さらに列石裏側の掘り方内から裏ごめの土とその中に含まれる拳大の礫が検出された。この掘り方は列石の前面においても確認され、整地土上面から掘り込まれていることが明らかである。また掘り方は1枚の石につき1つずつは対応し、一部の詰め石についても掘り方のあることが観察された。この切り合ひ関係の状況から中央から両端へと列石が据え並べられたと考えられた。なお、列石の掘り方は第V次調査3区、第VI次調査2区においても確認されている。

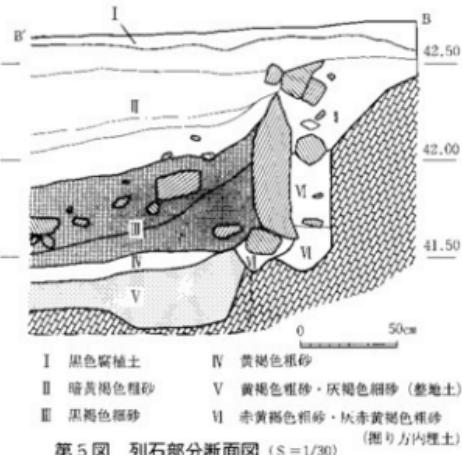
第V次・第VI次調査の結果、列石の構築順序として以下のことが想定される。1. まず溝を掘り割り、突出部前面を画し、突出部の長さをきめる。2. 列石を並べる範囲にだけ突出部側の溝の法面を削り出し、突出部前端の幅をきめる。3. 溝内に整地土を置き、溝の底を整える。4. 石列の石を据えるための掘り方はこの上面から、まず突出部中央に穿たれ、1枚の石が立て据えられる。5. この両脇にさらに石が立て据えられ、順に両端へと列石を構築する。この際、一部で石の下に置き土をし、石の上端の高さを揃え、また石と石の間に詰め石をする。6. 列石の上部には角礫が配され、突出部先端の区画が完成される。

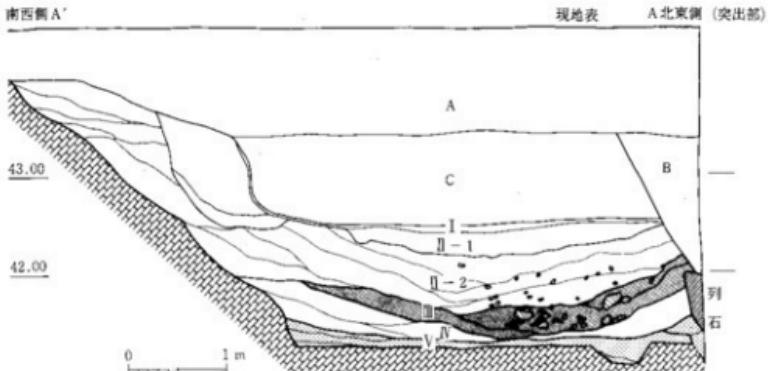
南西突出部先端の列石の調査は、給水塔築造の際の破壊と、給水塔の区画による発掘の制約のため、必ずしも充分とは言い難かった。

c. 溝の堆積状況

溝の堆積層は、大まかに次の6層に分けられる（第6図）。

1. A・B・C層 給水塔建設に伴う造成土
2. I層 1972年の地表
3. II-①層 近世以降の堆積土
4. II-②層 古墳時代以降の堆積土
5. III・IV層 古墳時代以前の堆積土





A・B・C 赤黄褐色粗砂・暗黄褐色砂砾（造成土）
 I 黒色腐植土（1972年の表土）
 II-1 淡黄褐色粗砂（近世以降の堆積土）
 II-2 暗黄褐色粗砂（古墳時代以降の堆積土）
 III 黑褐色細砂（古墳時代以前の堆積土）
 IV 黄褐色細砂（古墳時代以前の堆積土）
 V 黄褐色粗砂・灰褐色細砂（整地土・列石掘り方の埋土）

第6図 突出部溝断面図 ($S=60$)

6. V層 整地土および列石掘り方の埋土

各土層の堆積過程を復元的に述べると、以下の通りである。

溝の掘削後、溝底には整地土が敷かれ、底面は平坦にならされている（ただし、掲載図においては南側はやや高まっている）。整地上の厚さは、第V次調査3区・第VI次調査1区の部分では20cm前後を測るが、第V次調査2区など、ほとんど認められない箇所もある。整地後、北側には列石が施され、溝および突出部の構築は完了する（V層の形成）。

構築後、溝は南北両側からの流入土によって、徐々に埋没する。

初期の流入土は、粒子の粗い砂質土で、角礫・円礫・土器などをほとんど含まない。土砂は南北两侧から均等に流入し、緩やかな三角形の堆積を形成している。堆積の厚さは、溝の両脇の部分では平均45cm、中央部では10~20cmを測る。なお第V次調査1区および第VI次調査2区で、溝底付近から検出された花崗岩の巨石3石のうち、1石は本層位に、1石は次のIII層に含まれる（他の1石は基盤層中のもの）。この時期に、斜面から滑落したのであろうか（IV層の堆積）。

次に堆積した流入土は、粒子の細かい砂質土で、土色は有機質の作用によって黒褐色を呈す。また多量の角礫・円礫・弥生土器を含む。堆積の厚さは15~25cmを測り、IV層の上面をゆるいU字形の帶状に覆う。角礫・円礫・土器は、いずれも北側、すなわち突出部側からの流入土中に含まれており、列石の前面に、幅2m、厚さ20cm程の帶状の滲りを形成している。この範囲は、列

石の幅とほぼ一致していることから、角礫・円礫・土器は本来、列石の上方に配されていたものであることが判明した。また角礫は下層に多く、円礫と土器は上層に多い。このことから、最初に崩落したのは角礫であり、その後に円礫や土器が落ち込んだことがわかる。

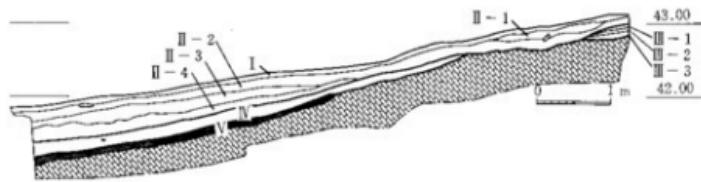
この後、溝内への土砂の流入は、一時中断したようである。このことは、本土層が有機質によって黒褐色を呈することからうかがわれる。一定期間地表面となり、腐植土が形成されたのであろう。この段階は、言わば、突出部前面の荒廃が最も進んだ時期でもある（Ⅲ層の堆積）。

以後の堆積は、古墳時代以降、中世を主体とした時期であることが判明している。この年代の上限は、第V次調査3区において、Ⅱ層の下面付近から、埴輪片が出土したことから知られた。埴輪片は川西編年のIV～V期に当る。また若干の円礫や、弥生土器片に混って、中世上器片が散見される。これらの遺物を包含する流入土は、粒子の粒い砂質土であり、堆積の厚さは溝の中央部で60～70cmを測る。堆積状況は、南北両側から間断なく流入したことを示している（Ⅱ-②層の堆積）。

この後、溝はおそらく近世に、再度掘削されている。掘り方は溝の南斜面を削り、底面を平坦に整形している。掘削は浅く、Ⅱ-②層の上半の一部を削平するに留まり、下位の層位には及んではいない。掘削の年代は、第V次調査3区において、掘り方底面付近から近世の大甕が1個体分検出されたことから知られた。なお第VI次調査2区からは、掘り方直上に構築された性格不明の配石が検出されている。このような掘削の理由は定かでないが、半ば埋没状態の溝を再利用した通路としての整備を意図したものかもしれない（Ⅱ-①層の形成）。

近世の掘削によって、給水塔造成以前のおおまかな地形はきめられたと言える。1972年の地表面は、近世の掘削後、わずかな流入土の堆積によって形成されており、厚さ3～5cmの腐植土と、その上の草木堆積から成る。調査団長の近藤義郎がかつて、南西突出部と溝とを撮影した時点の地表面は、これに当る。この時点で、溝中央部での堆積層の厚さは、溝底から約1.4mであった（I層の堆積）。

この直後、給水塔建設とともになう造成土によって、半ば埋没状態にあった溝は、その痕跡すら留めないまでに土砂で覆い尽されてしまった（C層の形成）。また給水塔の掘り方は、溝が平坦に整地された後に掘削されている。この掘削は、南西突出部のはば全体を破壊するもので、その南端が突出部前面にかかり、列石最下段のわずか上面を掠め、一部では最下段の石すらも掘り起している（B層の形成）。その後再び整地土が全面を覆い、現地表面が形成されるに至る（A層の形成）。A・C層を合わせた造成土全体の厚さは、溝の中央部で平均1.7mを測り、溝底から現地表までは、3.1mに達する。



第7図 突出部側面北壁断面図 ($S=1/80$)

註

1) 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』37 1977

d. 側 面

突出部側面の調査は、給水塔のフェンス西側、円丘部寄りに南北約5m、東西約8mの発掘区を設定した。現地表面となっている給水塔造成土は、約2mほどの厚さをもつ。発掘はこの造成土を除去したところから開始した。給水塔造成前(1972年時)の地表面は、東から西に向かってなだらかな下降面となっている。この地表面の東半分(5×3m)と西側北半部(3×2m)を逆し字状に基盤層まで発掘した(第7図)。

層序は、表土層が約5cmの厚さで堆積しており(I層)、その直下は流土層である(II層)。この層は傾斜に沿って、上方で20cm、下方に従って約40cmと厚くなっている。流土層は全体では4層に細分することができ、下方では3層が認められる。流土層中からは、若干の土器片、小礫が出土したのみである。また、盛土は、発掘区の東壁に沿ってわずかに15cmの厚さで認められる(III層)。盛土は3層に区分することができ、いずれも非常にしまりが強く、順次下層になるにつれて、バイラン上が多く含まれている。盛土層に関しては、発掘区の中では平面的・層位的にもごく部分的にしか確認できなかった。また、傾斜に沿って黒褐色の層を2層にわたって観察することができた。この層は上層(IV層)が約15cm、下層(V層)が約10cmの厚さで堆積している。いずれの層も、墳丘造成に由来する遺物をまったく含んでいないことや、この黒褐色土層の直下が基盤層であることなどから、下層の黒褐色土層はこの墳丘造成時の表土であると考えられる。上層の黒褐色土層については、下層と比較して黄色味が強く、下層とは質的に区分できることから、墳丘造成時の造成土と推定される。以上のことから、突出部側面において、墳丘造成時の状況は、給水塔造成前の地表面の傾斜とそれほど変わらないことがわかる。また、墳端については、

盛土の検出面がわずかであることなどから、充分な理解を得られなかつたが、この点は将来フェンス内部をさらに発掘することによって明らかにされるだろう。

第Ⅳ次調査時において、確認された角縁群については、発掘区内においてまったく検出することができなかつた。また、土器等の遺物についても同様である。このため、新たに発掘区の北東隅を幅1.5m、長さ2.5mほど、第Ⅳ次調査区にむけて拡張したが、ここでも角縁群、遺物はまったく検出することができなかつた。

このように、突出部側面の今回の調査においては、第Ⅳ次調査時にみられた角縁群の広がりはみられず、また同時に流土層中も含めて、遺物が僅少であったことも予想外の事実であった。しかしながら、下方において墳丘築成前の表土、さらに築成による造成土と比定されうる層及び僅かながらも盛土の一部が検出できたことは、墳丘築成法を考察するうえで、ひとつの手がかりとなるものであらう。

e. 土 器（第8図）

突出部前面の掘り割りの溝から出土した稻葉弥生墳丘墓に伴う弥生時代後期の土器は、そのほとんどがⅢ層中に含まれる。これらの土器は原位置をとどめていないが、土器の残存状態や接合関係から比較的近い場所からの流入であると考えられる。

器種は特殊壺形土器・小形特殊器台形土器が中心で、長頸壺形土器・器台形土器も若干認められる。壺形土器・鉢形土器は少量の出土にとどまり、特殊器台形土器・高杯形土器は溝内では皆無であった。出土した土器の多くは鋸齒文、綾杉文等で装飾され、丹塗りが施されている。これら遺物は現在整理中のため、詳細は本報告に譲り、今回は比較的完形に近いものや文様構成に特徴があるものを中心に図示した。

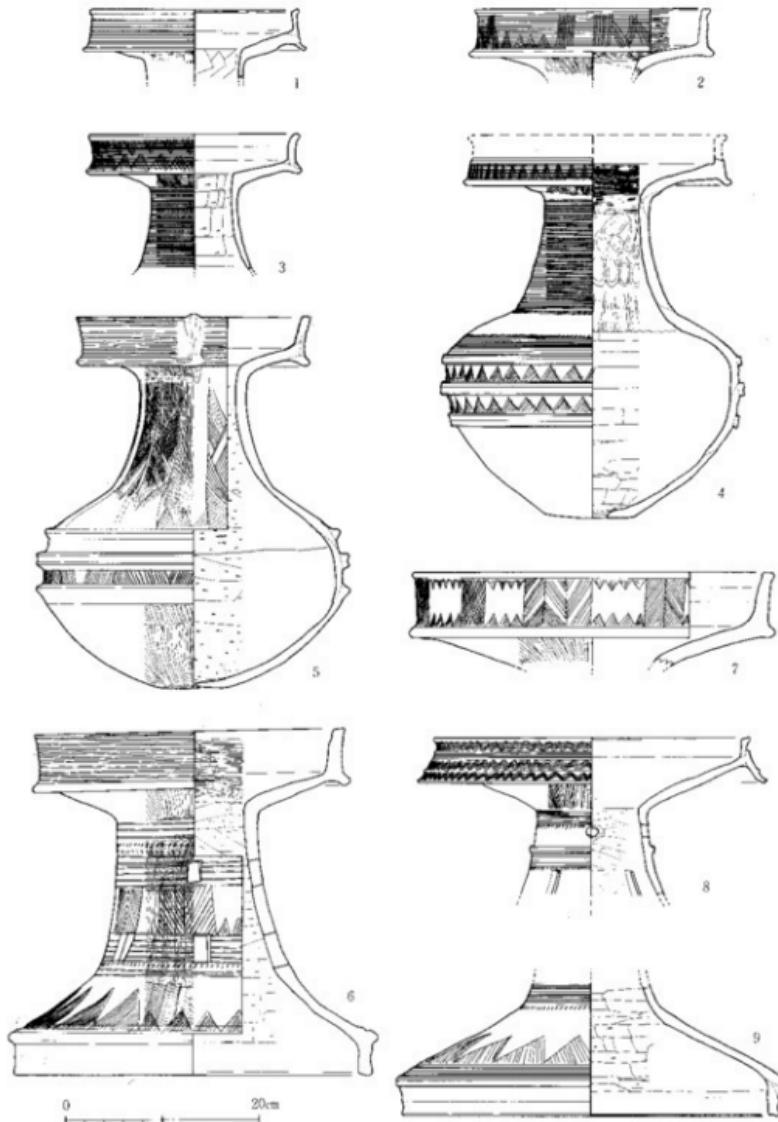
1～5までは特殊壺形土器あるいは長頸壺形土器と考えられるものである。

1は外面に丹塗りが施されている。口縁部外面には8条の沈線文が施され、端部には浅い凹線が1条はいる。頸部はわずかに残るのみであるが、横方向のナデが観察される。口縁部径は21.4cmをはかる。

2は外面丹塗り、内面は口縁部まで丹塗りが確認できる。口縁部外面の沈線文は一部ラセン状に連続的に施文されるが、上部までは続かない。また口縁部外面は沈線施文後、「人」形文、鋸齒文等で装飾されている。口縁部径は24.4cmをはかる。

3は外面丹塗り、内面の丹塗りは口縁部から頸部上端にまで及ぶ。口縁部外面には10条の沈線文がめぐり、上下に鋸齒文が施される。口縁部径は21.6cmをはかる。

4も外面丹塗りであるが胴部下4分の1から底部までは丹塗りは観察できなかつた。内面の丹塗りは口縁部から頸部上端にまで及ぶ。ヘラ状工具による装飾は鋸齒文のみである。底部は焼成後に穿孔が行なわれている。口縁部径は現存部分で25.7cm、器高も現存部分で37.0cm、胴部最大



第8図 出土土器

径31.2cmをはかる。

5は底部にも丹塗り痕があり、外面全体に丹塗りが施されていたと考えられる。内面の丹塗りは口縁部のみである。口縁部外面は沈線文が8条施されている。また口縁部内面から頸部外面上端にかけて粘土の帯が貼り付けられている。頸部上端から胴部上半にかけては変則的な複合斜線文・斜線文の他に鋸歯文が施されている。胴部突帯間の上段は風化が著しく、施文は不明であるが、わずかに残る部分を見る限り文様が施された状況は認めにくい。下段にはヘラ状工具による斜線が10数条ごとに方向をかえて施されている。底部には焼成後穿孔がある。口縁部径24.0cm、胴部最大径38.6cm、器高38.6cmをはかる。

6～9は小形特殊器台形土器及び器台形土器である。

6は胎土、出土状況から5の特殊壺形土器とセットになるとされる。丹塗りは脚端部から受け部内面にかけて認められる。口縁部外面には沈線文が施されているが、一部にはラセン状の施文がみられる。文様は筒部から脚裾部にかけて施されている。脚裾部は鋸歯文、筒部は綾杉文と鋸歯文などで装飾されている。筒部の透孔は上下2段あり、上段は4個所、下段は5個所にあけられている。口縁部径35.0cm、脚部径36.5cm、器高35.0cmをはかる。

7は図示した範囲の全面に丹塗りが施されている。口縁部外面は綾杉文・斜格子文・鋸歯文などで装飾される。口縁部径は37.2cmをはかる。

8は丹塗りの痕跡が認められない。口縁部罐は上下に著しく拡張し上端部には3条の沈線文がはいる。口縁部外面は櫛状工具による波状文および沈線文が施されている。口縁部径36.0cmをはかる。

9は外面の風化が著しく、脚裾部の一部を除いて丹塗りを確認できなかった。脚端部には刷毛状工具による凹線が1条はいる。脚部径は38.8cmをはかる。

土器の胎土は大きく4種類に分類することができる。

1・3・4は1mm前後の石英・長石を多く含むとともに、角閃石・金雲母もよく含む。色調は茶褐色を呈する。

2・9は前述の胎土と類似するが、角閃石・金雲母の含有量が少ない。色調は明茶褐色である。

5・6は1mm前後の石英・長石を多く含むとともに2mmを超える砂粒もよく認められる。角閃石・金雲母はほとんど認められない。色調は淡赤橙色である。

7・8も石英・長石を多く含むが、角閃石・金雲母はあまり認めるることはできない。色調は赤褐色を呈する。

2. 円丘部

a. A・Bトレンチ

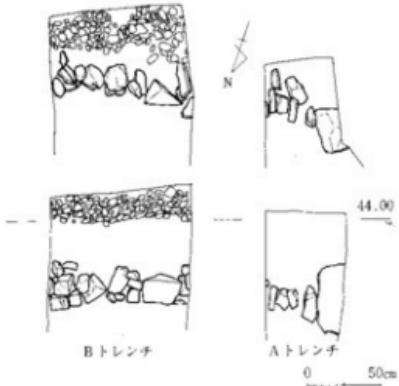
第Ⅰ次～第Ⅳ次調査において円丘部各斜面にトレンチを設け調査を行ったが、墳端については必ずしも明確な痕跡を見出すことはできなかった（第10図）。第Ⅴ次調査では第Ⅰ次調査時に設けた北西斜面の発掘区と一部重複して、A・Bトレンチを設定した。Aトレンチは、露出している第1石列の下方に設け、BトレンチはAトレンチの北側に幅0.5mの土手を残し平行に設定した（第2図）。

A・Bトレンチの上部では、円丘部斜面をめぐる第1、第2石列の構造を明らかにするよう、発掘を進めた。この結果、露出していた第1石列から約1m下方に、第Ⅰ次調査で検出されていた石と一緒に並ぶ石列が検出された（第9図）。第Ⅰ次調査時に検出された石は長辺約50cm、厚さ約3cmほどの板石（Aトレンチ西端の石）であった。それに対し第Ⅴ次調査で検出されたものは、概して小振りであり、10～20cm四方ほどの角礫ないし長さ10～20cm、厚さ5cmほどの板石である。石材は、ほとんどが花崗岩と思われる。これらの石は、外側に向かってやや傾斜し、ほぼ外面を揃えている。また後述する下層の黒色土層の直上に置かれた、あるいはめり込んだ状況が看取された。明確な石の掘り方は一部でしか検出されていない。

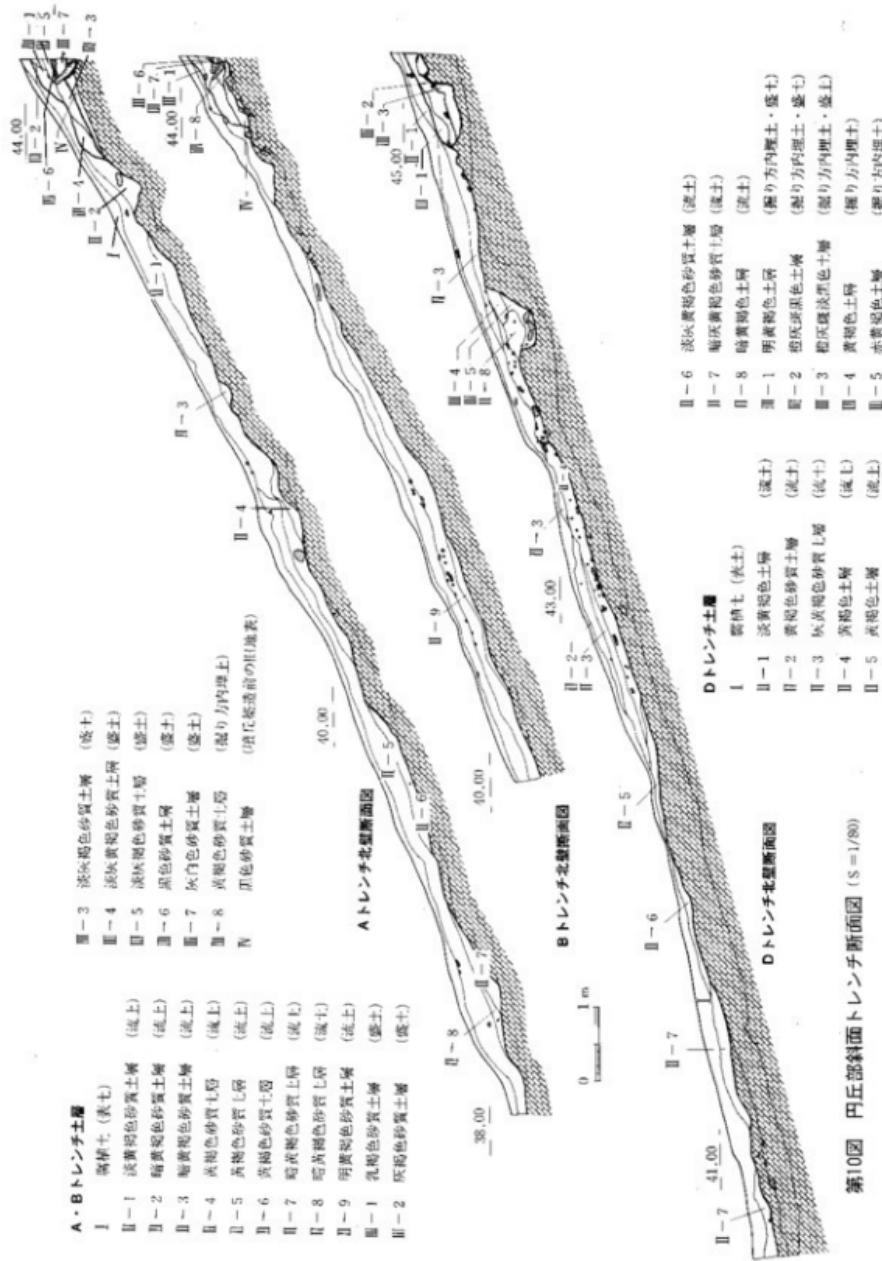
ここでは土層観察により、黒色土層が上下2層確認されている。下層の黒色土層（Ⅳ層）は、地山層と考えられる非常に硬くしまった花崗岩風化土層の直上に観察され、そのため墳丘塗造前の

旧地表層と判断している。上層の黒色土層（Ⅲ-6層）は盛土層と判断した。上層の黒色土層とその上下計3枚の盛土層は、検出された石列にぶつかるようにして途切れ、トレンチの下方へとは続かない。またこの石列は最上層の盛土層（Ⅲ-2層）によって隠され、埋め殺しの状態で墳丘面には姿を見せない。以上の観察から、この石列は土留めの機能を果たしたものと考えた。

Bトレンチでは、下層の黒色土層の下に入頭大の角礫が集中することが知られた。しかし、これらの角礫は地山層と判断した層に含有され、掘り方は検出されていない。のことから、角



第9図 A・Bトレンチ上部石列
平面図・立面図 (S=1/40)



第10図 円丘部斜面トレンチ断面図 (S=1/80)

礫は墳丘築造以前の地山層に元来混在していたものと考えられた。なお第Ⅵ次調査で、円丘部西側斜面にDトレンチを設定し調査したところ、円丘斜面をめぐる第1、第2石列の下部構造が検出された。詳細は後に述べるが、この所見をもとにすれば、A・Bトレンチ上部で検出された石列、角礫、黒色土層の解釈には別の可能性が考えられる。

Bトレンチの下半では、流土中に多量の円礫が検出された。この円礫の面的広がりを知るために、Bトレンチの北側の崖面まで発掘区を拡張した。この結果、円礫はBトレンチの下半および拡張区全域に広がることが判明した。そのいっぽうAトレンチでは、円礫は散在状態であることが確認された。

A・B両トレンチの下端附近では、人頭大の角礫が多量に検出されたが、人為的に置かれた状態とは認め難い。この状況の要因として、上方からの転落である可能性は大きく、その場合は第2石列を構成する石壁ないし石垣状の構造物の崩壊の結果と考えられるが、墳丘築造の際に削り残した地山層に含有されていたという考えも提出されている。

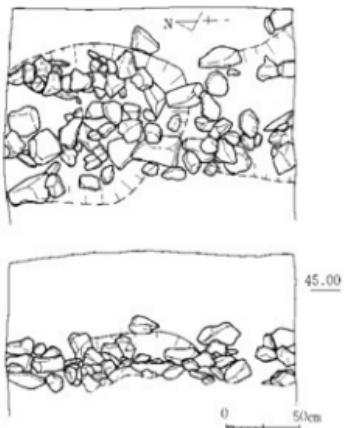
今回の調査において主目的の1つとした墳端の問題は解決したとは言い難い。明確に墳端を画する施設、構造物は検出されなかった。しかし地山の傾斜は、標高40~41m付近で変換点を持ちややテラス状になる。円礫は、この傾斜が緩やかになる付近に集中していた。墳端の問題はなお今後の課題として検討を要するが、顯著かつ明瞭な墳端は当初から形成されなかつた可能性も強い。またトレンチ上部で検出された石列が、円丘斜面をめぐる第2石列の一部であるか否かは断定できない。

遺物は今回図示していないが、弥生土器と中世土器がある。前者の量がやや多いが、いずれも少量であり、小破片ばかりで完形に復元できるものはない。弥生土器には特殊器台形土器、特殊壺形土器等がある。

b. Cトレンチ

円丘部東側墳端を確認するために発掘区を設定した。発掘前の表面観察では墳頂平坦面端部から約5m下がったところに2~3m幅の平坦面があり、そこに墳端を想定した。その東側は緩傾斜が続く。トレンチは2×9mで、国指定史跡範囲のすぐ外の墳丘斜面中から平坦面、緩傾斜がかかるように設定した。

調査の結果、トレンチ内には地山面にまで達



第11図 Dトレンチ

第1石列跡平面図・立面図 (S=1/40)

する後世の削平があり、墳端を想定した平坦面もこれによって形成されたことがわかった。この削平面の直上には円碟・特殊器台形土器片・中世土器片・瓦片を包含する流入土が堆積している。また削平が及んでいない墳丘斜面上部も特殊器台形土器片・円碟を含む流失土直下は地山面で、このトレンチ内では盛土及び墳端を示す遺構は検出することができなかった。

そこで同トレンチから4.5m離れた東側緩傾斜面に1×3mの拡張区を設け、盛土及び墳端を示す遺構の有無の確認を行なった。しかし同拡張区内でも墳丘に関係する遺構は検出することができなかつた。

c. D トレンチ

円丘部西側墳端及び外表施設の第1石列・第2石列の有無を確認するために発掘区を設定した。発掘前の表面観察では石列を認めることはできず、また墳端を想定させる明瞭な傾斜変換点も見出すことはできなかつた。

発掘区は国指定史跡範囲すぐ下の墳丘斜面中から2×9mの発掘区と、さらに下方へ1×6.5mの拡張区を設定した。

調査の結果、墳丘墓に伴うと考えられる遺構を墳頂平坦面端部から約3.5mと約6.0m離れた斜面で検出した。

このうち上部の遺構は標高44.5mに位置し、北西斜面に露出している第1石列と位置的に対応する。のことから石列自体は残っていなかったものの、第1石列跡を示す遺構と考えた。この遺構からは石列を並べる際の掘り方と石列を支えた下部構造を確認することができた。これによるとまず墳丘斜面を巡るテラス状の浅い溝を掘り、その中に石を立てつつ乳頭大の花崗岩碟と黒色の固くしまった埋土(Ⅲ-2、Ⅲ-3層)を充填することによって、石列を立て並べていたことが考えられる。ただし充填された花崗岩碟の配置には規則性を認めることはできなかつた。墳丘築成と石列築成の順序については、盛土に伴う旧地表面と考えられる黒色土層を発掘区上端でわずかに認めることができたものの、掘り方内埋土と明瞭に区別できることから、両者の先後関係は今回の調査では明らかにできなかつた。

第1石列から約2.8m下方にある遺構は標高43.5mに位置する。この遺構も細長いピットを重ね合わせたような溝状遺構内に碟が入っており、第1石列と類似の構造を示す。のことと第1石列との位置的関係から、この遺構を第2石列の痕跡と想定した。この遺構からは石列の石を抜いた痕跡(Ⅱ-8層)と、1~2段に重なった拳大の花崗岩碟がその抜き取り痕を囲む形で回る状況が一部で確認された。これらの碟は石列を立てる際の支えとして用いられたと考えられる。

第2石列からさらに下がった標高41.75mに位置する傾斜変換点を墳端と推定した。この傾斜変換点を境に墳丘斜面はほぼ平坦な面に移り、約1.5mほどでゆるやかな傾斜面へと変わる。墳端は地山削り出しにより、若干の平坦面を作ることによって墳丘斜面と外部とを区画したであろ

うという想定から、ここに墳端を考えた。

この他、第2石列の抜き取り痕の上層にあり、そこから墳端付近まで堆積する流土（II-4層）は、特殊器台形土器片及び中世土器片とともに多量の円礫を包含し、円礫溜りを形成する。今までの調査から第1石列と第2石列間には円礫帯があることがわかつており、そこからの流失の結果、この円礫溜りが形成された可能性がある。

また拡張区では一部に花崗岩風化礫の集石を検出し、突出部側方で検出した角礫群との関連を考えた。しかし土層観察の結果、礫の一部が地山中に入り込むことより、地山の石が一部地表に露出していた上に流土（II-7層）が堆積した可能性が強い。

III む　す　び

——樋築弥生墳丘墓の規模と範囲——

1976年の第1次から1983年の第IV次の発掘の成果に加え、今回の第V次・第VI次の発掘によって、樋築弥生墳丘墓の構造と範囲のおよそが判明した。ここでは、そのうちの範囲について、推定される規模とともにふれ、今後の本遺跡の保護及び史跡追加の資としたい。

本遺跡は、平面形が歪んだ円形を呈する主墳丘に対して、その北東および南西の双方に突出部をもつ弥生墳丘墓である。しかし、よく知られているように、北東突出部は、その下方の团地造成の法面として、未調査のままその大部分が削りとられて姿を消している。また南西突出部は、团地への給水のための貯水塔造成によって、これまた未調査のまま削平破壊されている。

そのうち北東突出部については、僅かに残存した主墳丘との連接部分について、第I次・第II次発掘がおこなわれ、辛うじて、その箇所に関する構造が明らかにされたが、その規模については、1972年の写真と幾人かの観察者の証言をまつはかない。それらによると、円形の主墳丘との境、つまり現存する3個の突出部方向に伸びる列石の南側から、約20mほど突出し、その先は、当時矢部から西山への峠道をなしていた深さおよそ3ないし4mの切り通し状の山道に面していた。

南西突出部については、給水塔工事によって完全に破壊消失されたと長い間考えられていたが、1983年夏におこなわれた第IV次発掘の際に、給水塔を中心に主墳丘と反対の側に、突出部前面の溝およびそれに落ちこんだ土器類・円礫などの遺物がなお残存していることを知った。そのことから、南西突出部は給水塔工事によって根こそぎ破壊されたわけではなく、その一部とくに、北東突出部ではすでに復原すべくもなく失なわれている前面の下方部が残っていることが推定された。

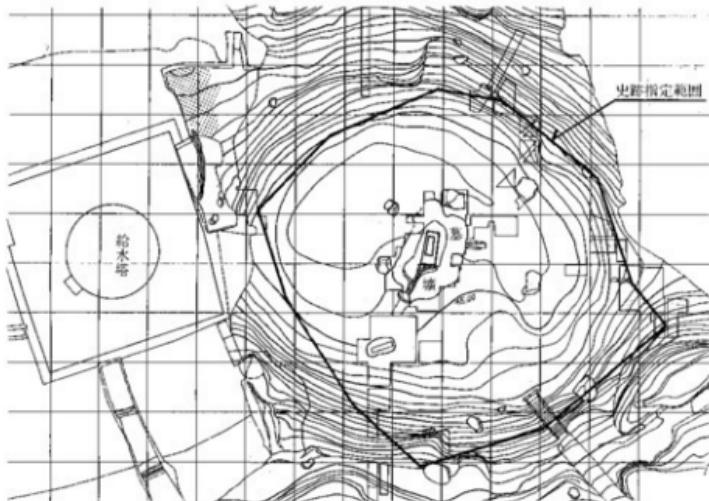
さらに円丘の主墳については、第I次から第IV次の発掘においても、墳端を明確に示す構造をつかむことができなかつたので、本遺跡の規模・範囲については、この点でもいっそうの追究が要請されていた。

今回の第V次・第VI次発掘は、以上のような状況の下に、おもに遺跡全体の現存部分の範囲の確認と、それに関連して南西突出部とその前面の溝の構造を明らかにするために行なわれ、上記Ⅱの1・2でのべたような成果をおさめた。それによると、本墳丘の現存最長部は、グリッドJ線の箇所（第2図参照）で、およそ72m、南西突出部前面の溝の現存外方端から測ると、同じくJ線でおよそ78mである。失われた北東突出部が、J線において7、8mの長さであったとすれ

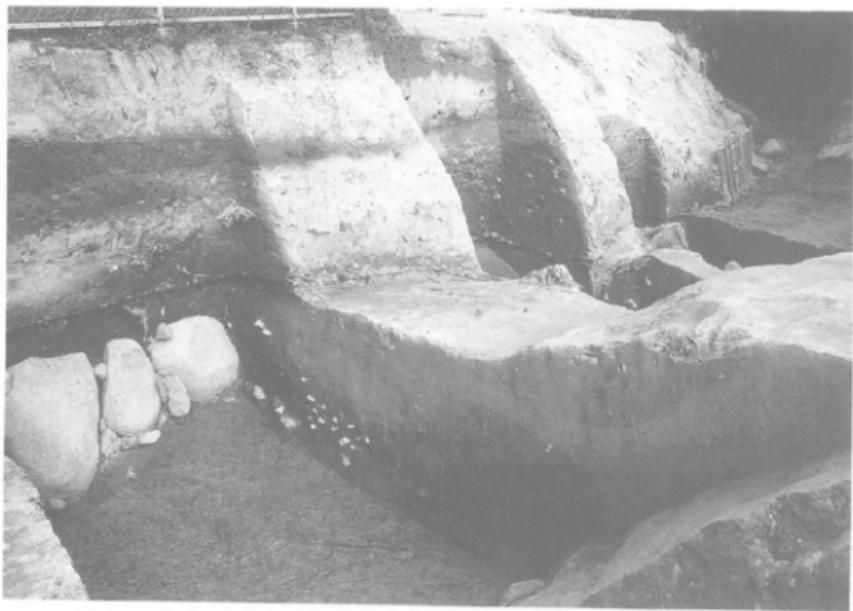
ば、墳丘全長は約80mに復原される。さらに、南西突出部前面の溝は丘陵に数m入った個所から掘りこまれたことは明らかであり、また北東突出部方向では先にのべた切通し状の道が推定されるように北東を画する溝の名残りであるとすると、さらに10m前後が加えられ、埴塗の全遺構部分は、全長およそ90数mと復原される。

円丘の主墳部については、すでにふれたように明確な墳端をおさえることができず、ひとつの有力な推定として傾斜変換線を仮に墳端としたが、その場合でも墳丘全体が歪みをもつ上、斜面各所に列石の抜き跡をふくむ破壊個所があり、径は東西・南北などにおいて異なる数値を示す。すなわち、両突出部方向で円丘部径を測ると約40m、北西—南東で測ると約50m、東西でみると約53mとなる。

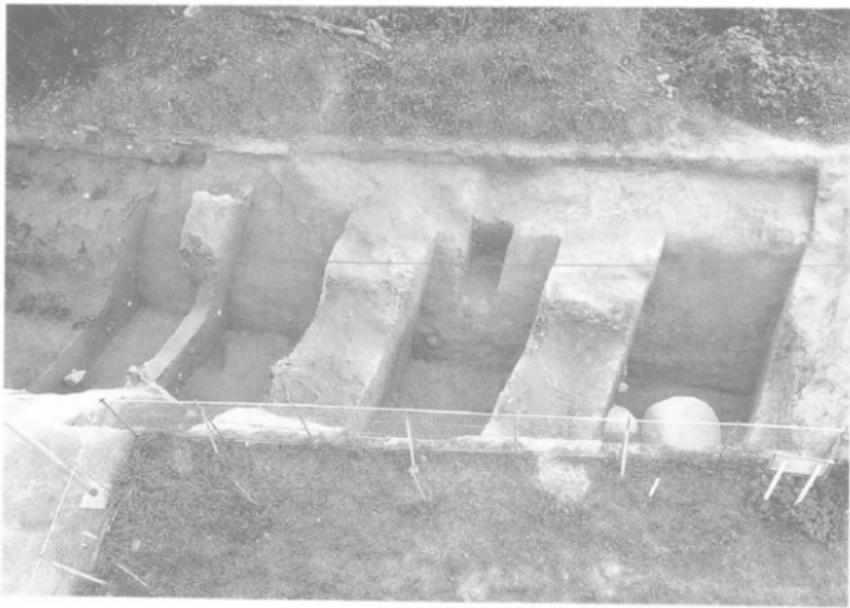
以上により、埴塗弥生墳丘墓の遺跡現存部の全範囲は、北東から南西にかけて最長約78m、推定最大幅は円丘部東西の53mとなる。それに対し、現在の史跡範囲は、円丘部の頂上を中心とする社地の約1千平方mである。したがって、今後における本遺跡の保護並びに史跡指定の追加等に際しては、上記の現存遺跡範囲に加え、さらにその周縁に少くとも10m以上の帯状ないし方角状の余地を考慮することが必要と考える。



第12図 堀塗弥生墳丘墓の史跡指定範囲 (グリッドは5m四方)



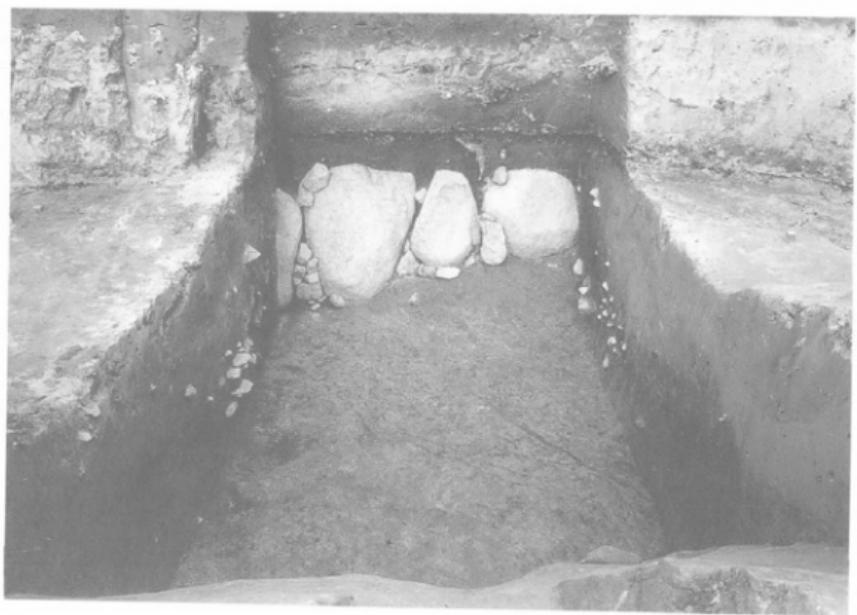
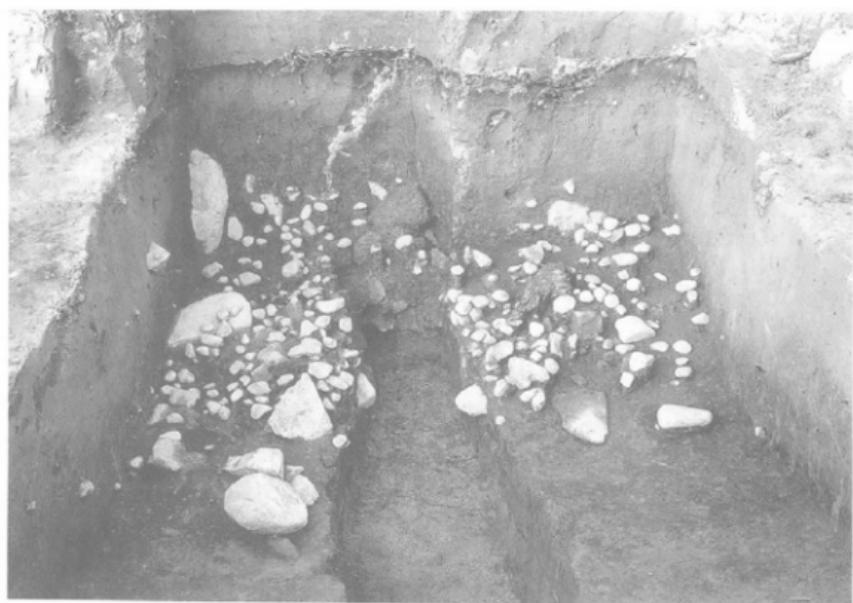
上 南西突出部前面の溝（給水塔建設前の地表）
下 南西突出部溝と列石



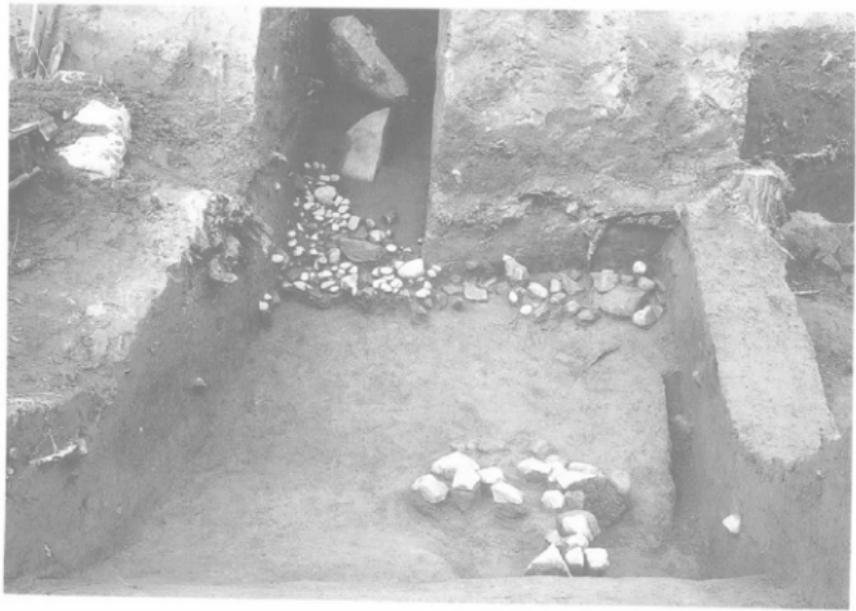
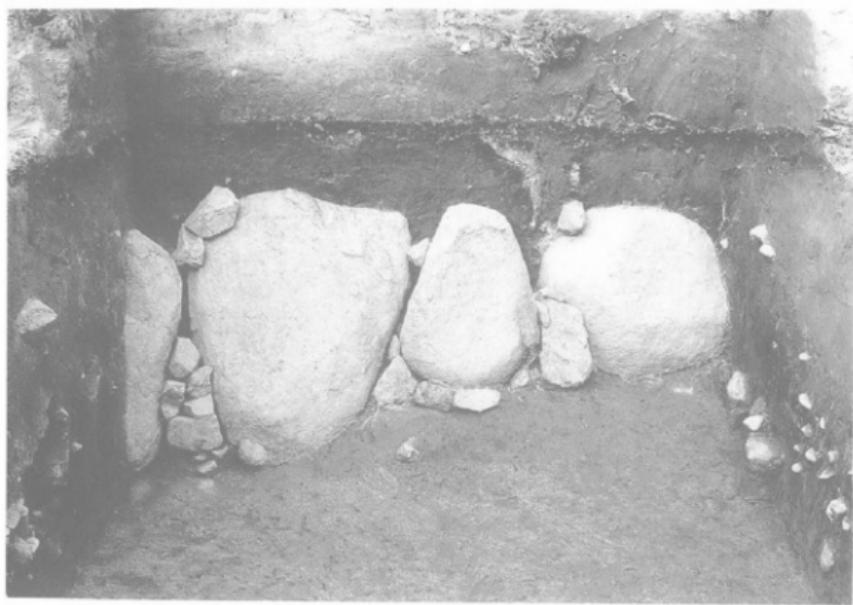
上 南西突出部溝と列石（南上方から）
下 同 上 （北上方から）



上 第V次調査1区の状況
下 同区北拡張部の状況



上 第V次調査2区円碟・土器出土の状況
下 同区の列石 完掘状況



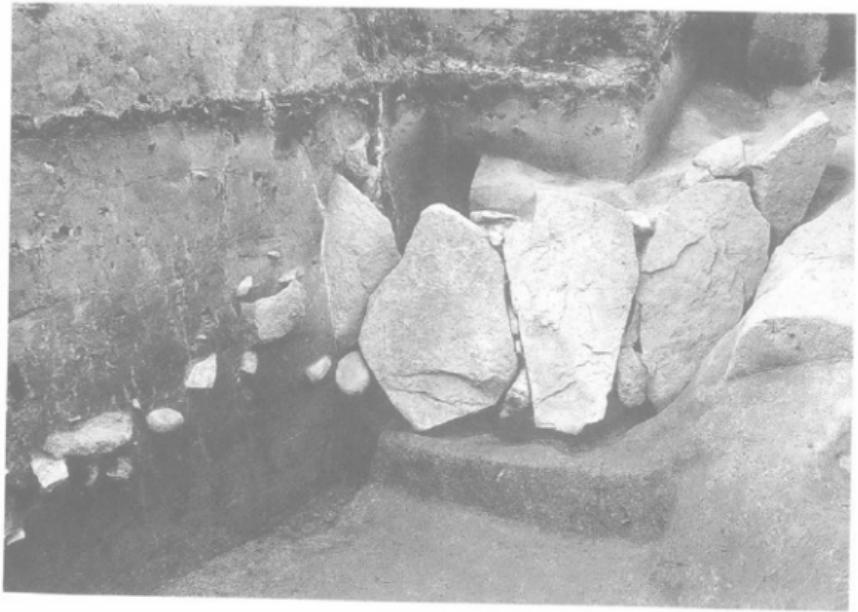
上 第V次調査2区の列石
下 第V次調査3区の状況



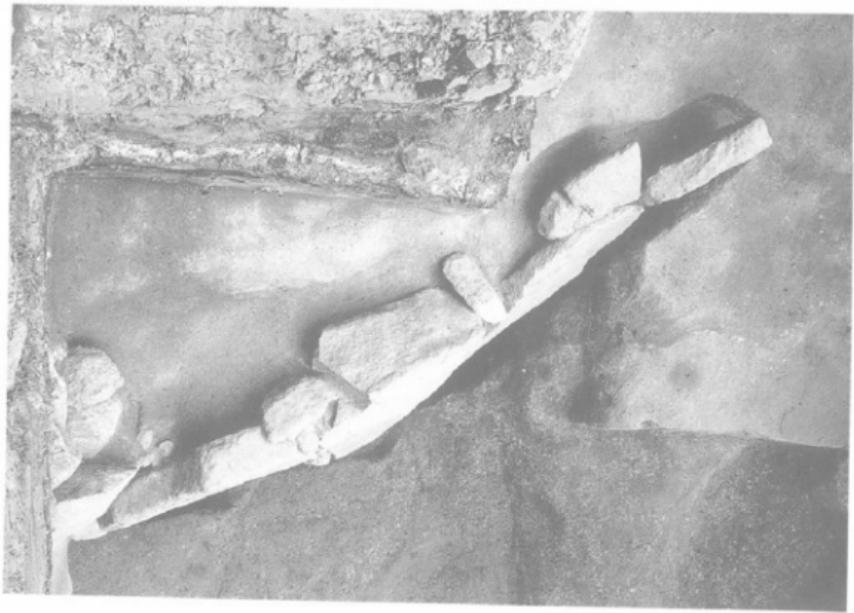
上 桶築弥生墳丘墓全景（気球写真）
下 南西突出部前面全景（気球写真）



上 第VI次調査1区の位置（南から）
下 同区の列石（南西突出部東隅）



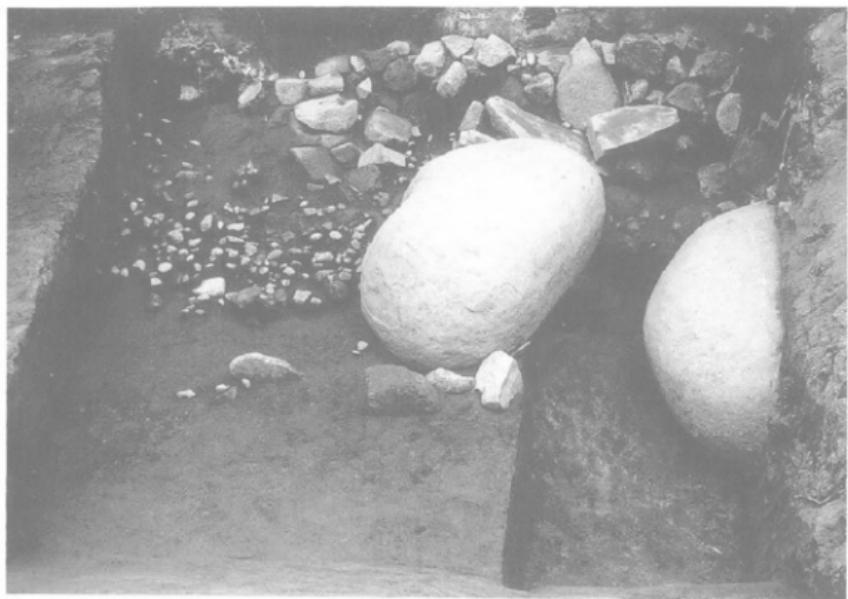
上 南西突出部列石東端の状況（南上方から）
下 同 上 （南東から）



上 南西突出部石束端の状況（東上方から）
下 同 上 (上から)



上 第Ⅶ次調査2区の全景（南から）
下 第Ⅶ次調査2区東側の溝と列石（西から）



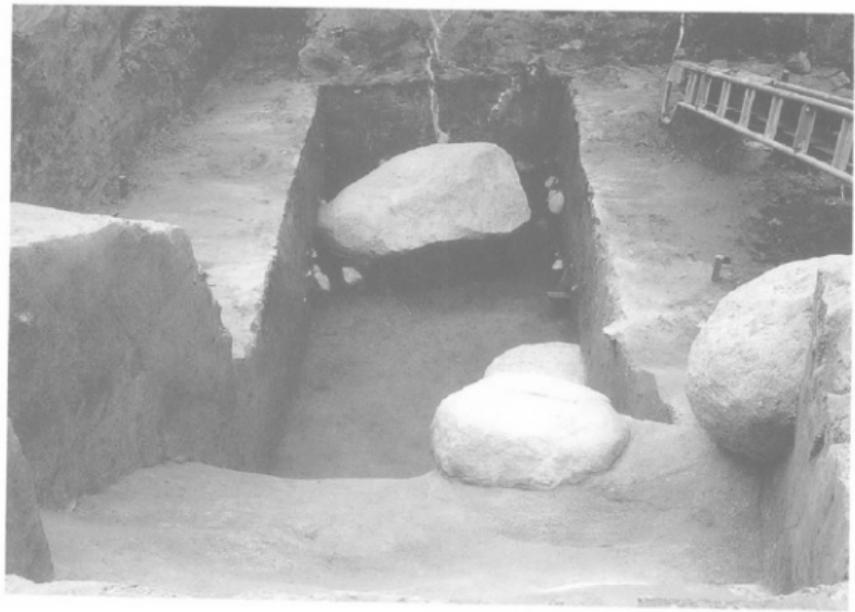
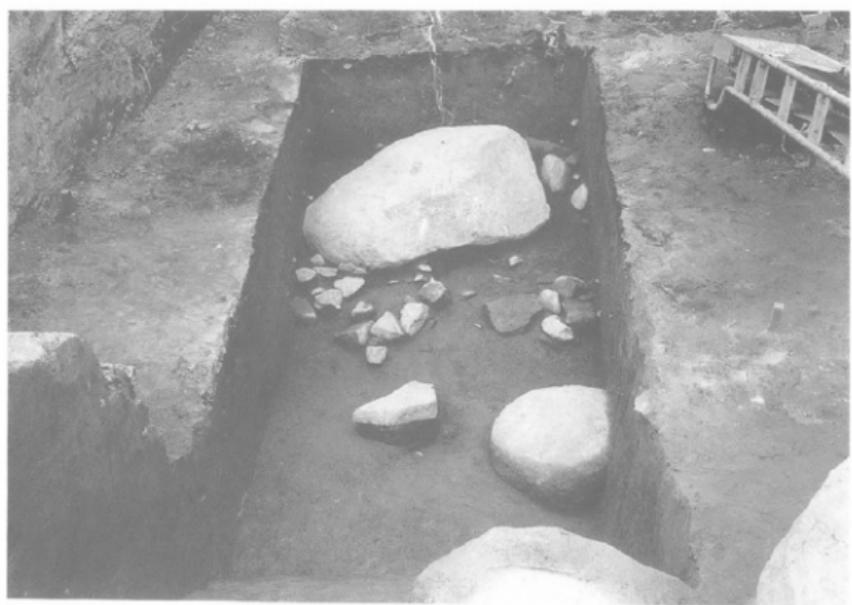
上・下 第VI次調査2区東側の円窯・土器出土状況



上・下 第Ⅳ次調査2区東側の列石



上 第Ⅱ次調査 2 区東側の列石（西から）
下 同 上 （上方から）



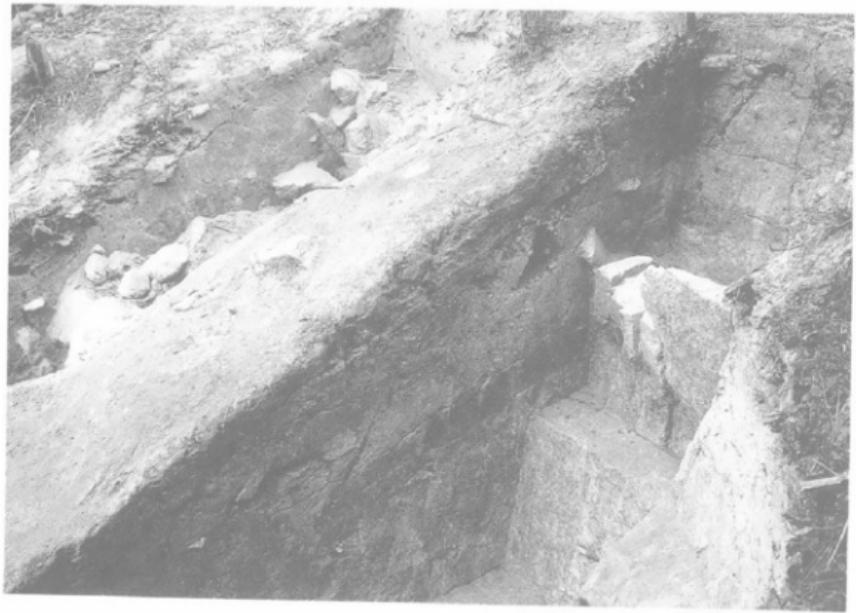
上・下 第VI次調査2区西側の状況



上 南西突出部側面（西から）
下 同 上 北壁



上 A・Bトレンチ全景（北から）
下 Aトレンチ下端の状況



上・左 Bトレンチ石列（北から） 上・右 同 左（上方から）
下 Aトレンチ石列と盛土の状況



上 Aトレーナー 石列（北から）
下 Bトレーナー 円縫の出土状況



上 Cトレーナ全景（東から）

下 Cトレーナ南壁



上 Dトレンチ 円礪の出土状況
下 Dトレンチ 北壁



上 Dトレンチ 第1石列跡
下 同上 第2石列跡

倉敷市樋築弥生墳丘墓
第V次(昭和60年度)・第VI次(昭和61年度)
発掘調査概要報告

1987年7月1日 印刷・発行

編集・発行 樋築弥生墳丘墓発掘調査団
近藤義郎 ©
印 刷 サンコー印刷株式会社

The 5th and 6th Excavation Report
of
Tatetsuki Yayoi Burial Mound

Editor Kondō Yoshirō

Contributors Furuichi Hideharu

Hōjō Yoshitaka

Kinugawa Kazunori

Kondō Yoshirō

Niiro Izumi

Ōhashi Masaya

Wakabayashi Taku

1 9 8 7

Research Group of Tatetsuki Yayoi Burial Mound
Okayama Prefecture, JAPAN